東日本大震災と原発事故後の現状と障がい福祉③

（2）興味深い話からもう一つ

脚本家　倉本氏の一説より

※風化とは、長い年月をかけて岩が砕けて石となり、石が砕けて砂となり、砂が砕けて塵となり、塵が風に乗って飛散し消え去る。そうゆう現象のことを言います。

それをもじって、心に刻まれたものが弱くなっていく様を世間では風化と呼んでいます。本来風化とは何千年、何万年、何億年かかって塵となり飛散することを言うのですが今の日本では違うようです。

わずか3年半前のあの原発事故、当時世界をあれだけ震撼させたあの悲劇の記憶が当事国の日本の中でこんなに速く、こんなに危うく、早くも風化の様相を呈し始めていることに僕は激しい怒りと悲しみを感じます。

東京オリンピックを招致したいために、この国の主が現在の現況を、アンダーコントロールと笑顔でぬけぬけと言い放つこと。

メルトダウンの始末もつかず、放射性廃棄物の処理の方策さえみつからぬまま政府が財界が、そして世論さえ、原発再稼働への舵を切り、さらには原発輸出さえ進めようとしている。

この事故で死の淵へ追いやられた方、故郷を捨てざるを得ない方々、今もなお苦しんでいる方々へなんと申し開きすればよいのでしょう。

地震・津波　⇒　自然災害

原発・風評　⇒　人災　　なんです。

《青田直喜様回顧》

ここにご披露しました震災当時の様子は、青田さんならではの思いが詰まった文面であり当時の思いや様子が伝わります。思えば当法人は震災後スタッフも半分以上入れ替わり、当時を知る方は数えるほどになり、ご利用者も含めて青田様を知らない方には当時の思いを知って頂き、震災を乗り越えた今がある事を伝えたい気持ちで特集を企画しました。 その青田様は残念ながら去る平成 27 年 10 月 16 日 68 歳で故人となられました。がっちりした体躯ながら温和な性格で何方からも慕われ、県社協の講師をはじめ市内各種団体の要職を歴任するなど功績は勝るとも劣らない方でした。出身は福島県社会福祉事業協会職員で定年後、ポニー事業所施設長に就任、ポニー、身友会、ひばりの合併に尽力頂きました。どうぞこれからもはらまちひばりを見守ってください～。 合掌

編み人形のご寄贈

2/26 市内北町にお住まいで昔から法人のためご尽力を頂いている小林一男様から「編み人形」のご寄贈がありました。色合いと言い表情と言いどなたの心もほっとさせる優しいお人形です。さっそくご利用者さんから見られる棚に飾りました。いつまでも大切に愛用いたします

木目込み人形のご寄贈

2/8 ご利用者の津田様からはケースに入った木目込み人形の「おひなさま」を頂きました。お母様の手作りですがこれまで殺風景なポニー作業所に飾りました。

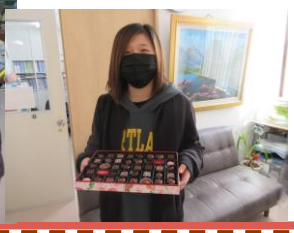
2/13地震の影響は？

この日は震災後 10 年を間近にした午後 11 時 7 分に起きた地震は震度6弱と言う大きさに一瞬驚きました。幸いひばりには被害がなくてホッとしましたが、外にある電線が垂れ下がり修理は1時間程で完了。ただ近くの市町村では瓦が落ちる被害が沢山あったようです。

ひばりアレコレ

お届け物に感謝！

ご利用者さんからは時折色んなお届け物があります。今回はチラシで作ったごみ入れをはじめ美味しいチョコレート、そしてブロッコリーに手作りクッキー等々のお気遣いを頂きました。それぞれの御品はご利用者さんが直接ご使用したり、お食事の副食として頂いたりおやつになったり皆さんにとっては本当に嬉しいお届け物になりました。



まけねえど福島！！

(2012 年 2 月　静岡県講演用執筆原稿から)

はらまちひばりワークセンター　　前施設長　青田　直喜

はじめに　皆さんにお話をする機会をいただきましたことに感謝申し上げます。多くのご支援のおかげで、めげずに前向きになって来ました。

1、事業所はその時(3 月 11 日午後 2 時 46 分)　・15：00 作業終了間際、震度 5 強の揺れが・・・
全員立っていれず床にはいつくばる。2 度、3 度と繰り返し揺れが・・・テレビ画面は「東北地方で強い地震がありました」のテロップのみ　「沿岸部海岸部では津波に注意」のテロップが・・・
※当事業所は沿岸部より 4ｋｍ内陸にあり、物品の片付け、利用者の帰宅準備　津波は 1～2mの予想・・・
15：00 通常帰宅(自宅の状況による諸連絡の指示)スタッフも 15：30 早目の終業とし自宅家族の安否の為帰す。　※後しだいに電話が繋がらなくなる。

津波が予想以上の恐怖の勢いで襲いかかる等思っていなかった。帰宅時に車のラジオ、河川橋で見た逆流してくる黒い水に体が固まってしまう。

途中の家屋敷・道路等の崩壊・亀裂の様子に自宅を心配する。・時が経つにつれ電気・水道・通信等が悪化してくる。

2、事業所の被災後の経緯
※地震さえなければ４／1 順調に移行事業は展開されていたはず。
(1)利用者、関係スタッフの動向確認　(2)事業所を開ける　(3)スタッフ会合できた
(4)無認可でも再稼動　(5)新事業移行認可までの動き　(6)認可、そして新事業移行による稼動

3、振り返って思うこと
・天災といわれる自然現象の恐ろしさは、自然と共存している私共の宿命的な出来事かも知れません。ただ残念なことは東電事故による引き起こされた取り返しの出来ない事態です。
・つい先程まで生活住居していた家・土地・仕事・学校・山も川も人々も失ってしまう現象は想像を絶することです。何十年もかかってしまうと言われる方々にとって、**元に戻ること自体にどんな希望を託せばよいでしょうか。**

(1)障がいを持っている方々からは　この事故等の現象から
①何がなんだか判らない　②何をしたらいいか判らない　③避難したくてもできなかった
④誰か来てくれると思ってた　⑤動くことができなかった. . . 等々

(2)言われるがまま、知らされていたことだけの判断
① 誰も声をかけてくれなかった　②居た方がいいと思ってた
③ついて行けない、一緒の動きがとれないから　④迷惑がかかるから

(3)避難した障がいのある方には
① 半数以上の人が 3 週間以内に戻ってきた　②環境の変化でストレスパニックを生む
② 運動不足、情報不足、淋しい　④落ち着かず、大声を出し、泣き出し、不安定に
⑤ 周りの視線が気になる、居づらい　⑥コミュニティの問題がある
⑥ 危険回避できにくく、目が離せない
⑦ 仮設自体が障がい者向きになっていない　構造、バリアフリー化等

4、エリア内の事業所状況から
原発から 30 km圏内避難地域には、施設作業所等 56 ヶ所があり、再稼動しているところは 32 ヶ所。
その先陣は作業所(事業所)だった。震災後 4 月、5 月と 1 ヶ所また 1 ヶ所と再開への頑張りを広げて来た。
(1)目の前に困って疲れ果てた家族を何とかせねば　(2)金でない人道としての思い
(3)福祉の原点はやはり人で決まる

5、現在、今後に向けて動いていること
要援護者避難計画の作成(立ち上げ)を何はともあれ、どのような方々がどこにどんな状況で住居しているのかを知らねばならない。
※「情報の共有化」が必須
個人情報という法的(人権的)な見知が必要だが、手をさしのべ介助、保護せねばならない弱者と言われる方々が、地域社会に多く居ることを意識して欲しい。
社協・民生員・警察・消防団・病院・施設・作業所等々いざとなった時に開示も可能なような手法が必要。
※拠点となる所も設定する
地区に地域の構図にそった拠点箇所を設けておく非常事態に備えた内容にして。
※自立支援協議会の中に緊急災害対策部会を設置
検証と今後について展開。